小学校五年の部　佳作

対象作品／漆原智良著『かがやけ！虹の架け橋』アリス館

東日本大しん災から学んだこと

弘前市立堀越小学校　白戸咲綾

この本は、わたしが生まれた年に起きた大きな地しん、東日本大しん災の大津波で、子どもをなくした遠藤さん夫ふのお話です。父や母から、「たくさんの人が津波でなくなった」という話を聞いていたので、「3・11大津波で三人の子どもを失った夫ふの物語」という見出しに興味をもちました。つらい内容で、と中で読むのがこわくなってしまうかもしれないと思いながら、実際に体験した人の思いや、命の大切さにふれたいと思いました。そして、悲しい気持ちからどんなふうに前を向いて生きてきたのか知りたいと思いました。

遠藤さんは、つまと三人の子どもの五人家族です。いつの間にか、わたしは自分の家族と重ねながら読み進めていました。遠藤さんが地しんにあったのは、一人で車を運転していた時です。二分以上の地しんが、半日も続いたように感じたほどのおそろしさで心細かったはずなのに、その不安の中で自分のことより家族のことを考え、心配するすがたに気持ちが強くてやさしくてすごいなと思いました。地しんのあと、学校に子どもたちをむかえに行ってみんな無事だったのに、安全だと思っていた家が、大津波に飲み込まれてしまったのを知った時の遠藤さんのつらさが伝わって、心がとてもいたく苦しくなりました。大好きな町、家がぐちゃぐちゃになり、大切な子ども達も失って、「今起きていることが現実なのだろうか？」と感じた遠藤さんのくやしさ、悲しみ、いかり、さびしい気持ち、色々な感情がこの一文ですごく伝わってきて、わたしも重い気持ちになっていました。子ども達を守れなかった自分をせめながら、何のために生きているのかわからないと苦しむ遠藤さんが、他のひ災者の方と寄りそい支え合って、心を一つにして生きることに力を注いでいけるようになった時に、わたしの気持ちも少し軽くなっていきました。遠藤さんが夫ふ二人で生きていくしかないんだ、生きていこうと思えた時に、わたしの気持ちがすっと明るくなった気がしました。

木工所で仕事をしていた遠藤さんに、本だな作りのいらい

が来て、使う人の気持ちを考えながら一生懸命取り組むすがたがかっこよく、今までしずんでいた遠藤さんとは別人に思えました。本だな作りをきっかけに、前を見てしっかり進んでいく遠藤さんが、天国にいる子ども達を思い、虹の絵をかいた遊具「虹の架け橋」を完成させた時に、わたしも幸せを感じました。なくなった人と一緒に生きる幸せはないが、そん在を感じる幸せはあるという考え方がすてきだなと思いました。最後にわたしが心に強く残ったのは、「小さな喜びを多くの人が感じられるようになり、さらにそれがつながっていけば生きる力がわいてくる」という文です。楽しいことばかりではないけれど、こんなんにぶつかった時にこの文を思い出し、命を大切にして成長していきたいと思います。